

林忠彦賞 20年のあゆみ

有田 順一

林忠彦賞が記念すべき20回を迎えました。今では全国的にも知られる写真賞になりましたが、一朝一夕にここまで来たのではありません。多くの方々の汗と涙と、そしてなにより温かく見守ってくださった市民の皆様のお陰であると深く感謝いたしております。それでは、今日にいたるまでの流れをすこし振り返ってみたいと思います。

1982年、徳山市文化会館が開館、徳山市文化振興財団が受託し、観劇や展覧会を主体とする公による文化振興が幕を開けました。さっそく郷土の文化や人物を紹介する事業が立ち上がり、現役で真っ先に取り上げたのが林忠彦氏でした。1983年に開催した「日本の家元」写真展、講演会は当地で初めて開催された本格展で大きな反響を呼びました。その後有ろうことか林氏に肝臓がんが見つかりました。そこで林氏は余命と照らし最後のテーマに「東海道」を掲げられたのです。そんな林氏の果敢な挑戦は、連日マスコミが報道し、時の人となっていました。1988年には、全国巡回の「林忠彦50年写真総集展」を徳山でも開催し、徳山市市民文化栄誉章も授与しました。そしてついに1990年、写真集『東海道』を発刊、その完成を見届けるかのように旅立られました。享年72歳。それは壮絶な最期でした。

そして時をまたずして林氏の顕彰活動をという声が高まってきた。全国各地で官民さまざまな動きがありました。しかし林忠彦賞の方は、長期展望に立った運営が必要なことからプロパーを配する徳山市文化振興財団が担当することになりました。後発でしかも地方発信の写真賞であることから、全国に周知するための体制づくりに力が注がれました。

現在進めている「写真のまち 周南」もここがスタートとなりました。

オリジナルプリントの収集は、林家との交渉ですから計画的に進めることができました。しかし林忠彦賞の方は、長期展望に立った運営が必要なことからプロパーを配する徳山市文化振興財団が担当することになりました。後発でしかも地方発信の写真賞であることから、全国に周知するための体制づくりに力が注がれました。

選考委員の充実が叫ばれ、著名写真家にお願いしましたが、その顔となる選考委員長は秋山庄太郎氏に引き受けいただきました。

秋山氏は、戦後1947年、銀座のバー「ルパン」で林氏と意気投合して以来、作家活動はもちろん日本写真家協会の設立、二科会写真部の創設など常に林氏とともに行動され、林芸術のすべてを知り尽くしておられました。また女性ポートレイトに優れ、一般への知名度も抜群でまさに最適任者でした。さらに全国に放送網をもつKRY山口放送が

共催者として初回から参加されたことは、報道面においてとても大きな力となりました。当初は、徳山での授賞式の後、全国賞であることから東京でも発表会、写真展を開催しました。とくにその足場となる写真展会場が由緒ある京セラ・コンタックスサロン銀座に決まった時は、思わず飛び上がったほどです。

応募要項については、①対象 毎年1月から12月までの間に写真展、写真集、雑誌などによって発表されたもので、写真表現のすべて。②資格 アマチュア写真。③テーマ 自由。④作品保存 受賞作品は再制作し徳山市が林コレクションとして永久保存する。等々が主な骨子となりました。応募資格をアマチュアとしたのは、林氏が後半生、二科会写真部、写真クラブなどでアマチュア写真の向上発展に尽力された点に重きをおいたことによります。とはいもののアマチュアの定義は難しく、細部の調整は、選考委員会にゆだねることでスタートしました。ここでは、林賞の今日までの変遷を5つの期間に分けて見ていただきたいと思います。

草創期(1回・1992~4回・1995)

とにかく賞の存在を全国にPRすることが第一義となりました。そして1992年、第1回が、「西域—シルクロード」(写真集)に決まりました。中型カメラと4×5によるフォト・ドキュメントで、表現、構成、技術と林賞の端緒をかざる作品でひとつの基準となりました。賞の性格といふものは、どうしても受賞作品がその後の動向を決める傾向があるからです。1995年、第4回「帰らなかつた日本兵」は書籍での受賞でした。インドネシアに棄民として生きる元日本兵の存在を戦後50年を機に発表したものでマスコミにも大々的に取り上げられました。それにより元日本兵らの名誉回復もかない写真が世論を動かす力を間近で体験することができました。

同年、写真界ではその歴史をも塗りかえてしまうほどの大きな展開がありました。写真家にとって将来さけることのできないIT化が本格化したのです。ウンドウズ95が発売され、フィルムカメラからデジタルカメラへの切り替えが始まりました。それは林賞にとっても後年大きな変化をもたらすことになりました。

この年、当地徳山では、市民待望の記念祝賀がありました。徳山市美術博物館が開館し、その一角に林忠彦顕彰活動の中心となる林忠彦記念室が開室したのです。センター施設ができたことで、林芸術の真髄となるオリジナルプリントの常設展示が可能となりました。

そして翌1996年、林忠彦賞の創設来の活動が評価さ

れ、同賞の制定と運営に対して栄誉ある日本写真協会文化振興賞を受賞しました。この期間の受賞作は、故郷や生活圏の中にテーマを設け、長年掘り下げて取材する作品が続きました。第2回は「田園の微笑」、第3回は最優秀作が伯仲し「静岡の民家」と「たかちほ」の2点が受賞しました。高度な撮影技術と印画技術は必須でした。

発展期(5回・1996～9回・2000)

写真界では、どうにか全国的にも知れ渡り、賞の受容範囲がためされる時代でした。バブル崩壊後の混沌とした社会情勢のなか、世相を反映した作品が続きました。第5回「追いつめられたブナ原生林の輝き」、第6回「サバンナが輝く瞬間」は、自然環境の破壊と保護がテーマで、経済発展とは裏返しの回帰志向や癒しを求める作品が出てきました。第7回「ぼくは、父さんのようになりたい」は、カシュガルの父子がテーマで、家庭崩壊が問題化するなか、家族の大切さを教えられました。第8回「天空の民」は、秘境に住む世界最小の民族を取材したもので、現代社会とは何かを問うたインターナショナルな作品となりました。また同年、選考委員会は準賞として昭和30年代の埼玉・秩父の記録である「戦後の山村」に対して特別賞をおくりました。この頃までは、大きくドキュメンタリーの範疇でくくれる作品が続きました。

しかし、第9回「Personal View[視線の範囲]」の受賞は、心象的な作品で次の時代の扉を開けました。

また1995年、嬉しいことに写真の町の先達である北海道東川町から、林忠彦賞受賞記念写真展の巡回依頼がありました。林賞が北海道でも広まるのは、この上のない申し出で翌年から東川町文化ギャラリーにおいて同展を引き受けいただき現在も継続事業となっています。

安定期(10回・2001～12回・2003)

やはり、10年を経過すると善し悪しにかかわらず見直しが必要になってきました。

まず成果については2001年、地元写真家らによって街中に写真を展示する「徳山フォトエキシビション」が立ち上がったことです。「写真のまち 周南」の理念は、官民あげて写真によって地域の新しい文化を模索しようというものですが、この事業はその後5回開催されました。林賞が種をまき地元写真家らがそれに呼応したもので、写真文化が着実に当地に浸透しているのを実感しました。

この時期は、第10回「塩の道 秋葉街道」、第11回「ニューヨーク地下鉄ストーリー」、第12回「静かな時への誘惑」とフォト・ドキュメント、フォト・エッセイ、心象的写真と多彩な作品が受賞、選考委員会も新しい表現を取りあげよう

という気運がみなぎっていました。

IT事情はますます加速しカメラの世界は大きくかわりました。2001年、デジタルカメラの販売台数がついにフィルムカメラを追い抜いたのです。このあたりからフィルムで培った経験があまり役に立たないという未知の世界に突入しました。12回からは、デジタルなどの多様な表現に対して、募集要項に「新しい写真表現を目指す作家」の参入を謳いました。

その矢先、第12回選考委員会の席上、衝撃がおそいました。秋山委員長が心臓発作で倒れ夕刻急死されたのです。この死は、林賞の最大の支援者を失うとともに古きよきフィルム時代の終焉を告げる悲しい先駆けとなりました。

2003年4月には、平成の大合併で当地でも歴史が変わる大きな出来事がありました。徳山市、新南陽市、熊毛町、鹿野町が合併し、周南市となったことです。林忠彦賞は、新市でも先人の顕彰事業として引き継がれることになりました。

変革期(13回・2004～17回・2008)

まずは選考委員長の後任選びから始まりました。やはり林忠彦氏本人をよく知る写真界のリーダーということで、日本写真家協会会長の田沼武能氏にお願いしました。田沼委員長には、13回から15回まで、その後、16回は岡井耀毅氏。17回からは細江英公氏が就任され今日にいたっています。

この時期は林忠彦賞とは何かを改めて考え直すことになりました。

課題としては、①発足時の運営体制のままで時代に取り残されないか。②アマチュアの定義が曖昧なため応募者が混乱している。③デジタル全盛の時代、多様な表現をどう扱うか。④将来何をめざすのか。などが主なものです。実はこの頃から応募者にアート系の作品や、デジタル作品さらには加工ソフトをもちいたものが、目立つようになりました。フィルム派は年を追うごとに減ってきました。

2005年、ITの企業間競争は激しく、長年東京会場を提供くださった京セラが本賞から撤退されました。草創期からのお付き合いでの一抹の寂しさが残りました。その後、会場はJCIIと続き、2007年からは、富士フィルムに担当いただき今日を迎えていました。

アマチュアの解釈についても、①プロでも仕事の少ない修業時代はほとんどアマチュア扱いであること。②プロであっても報酬をともなわない自主作品はどうなるのか。③アマチュアでも収入を得て仕事をしている場合は、など実際判断のつかない難しい問題ができました。

また運営面についても、林賞を写真関係だけではなく、

全市民が支えようとなり2006年より、本市出身の彫刻家・笛戸千津子氏に副賞の制作を依頼しました。今ではおなじみとなりましたが、ブロンズの少女像「爽」は、林賞にも通じるくったくのないすがすがしさが表現されています。

この期間の受賞作で、写真の力を感じさせたのは、第14回「古志の里Ⅱ」でした。2004年10月におこった新潟県中越地震で壊滅的な被害に見舞われた山古志村とその周辺を十数年にわたり記録したものです。そこに写っていたかつての棚田や山里の風景は人々の復興のエネルギーになりました。また第15回「繭の輝き」は、戦前から昭和30年代まで養蚕業で栄えた群馬県の現況を記録したものです。この作品は富岡製糸場の世界遺産登録にむけてのシンボルにもなっています。第13回「海を見ていた一房総の海岸物語一」、第16回「黄土高原の村/満蒙開拓の村」は、それぞれ、故郷の海と中国をテーマにしたフォト・ドキュメント。第17回「長崎フォトランダムー長崎ば撮ってさらき、半世紀ー」も故郷の風土と家族を追ったフォト・エッセイでした。

デジタル化は進み、この頃になるとフィルム派といえども制作工程のどこかでデジタル処理をしなければならない時代に入っていました。「長崎フォトランダム」は、それまで写したフィルムをすべてスキャンし、その後出力加工し写真集としてまとめたものです。

2006年には、国民文化祭が山口県で開催されました。写真に力を入れている活動が認められ周南市が写真展会場を担当しました。これは林賞を核とする「写真のまち 周南」を国民行事の中でアピールできる格好の機会となりました。

この時期、選考委員会では、毎年、林賞の今後の方向性についての議論が続きました。そしてようやく見出したのが、「林忠彦は写真界の星である。もっとも輝いていたのが、「太宰治」「坂口安吾」などを撮り、さつそうと表舞台に躍り出た戦後の焼け跡闇市時代である。すなわち林の写真が社会を揺さぶったのである。そのプロとして一番エネルギーッシュな時代に照準を合わせたらどうか」でした。要約すると、社会が欲しているその時代を一番象徴する作品を選ぼうとなったのです。そう考えたら、アマ・プロといついたら收拾がつきません。それで自由化を決定しました。

ちょうどその頃、すでに写真各賞を総ナメした大家からも応募したいと声があがりました。すでにプロからみても林賞は、目標に倣する賞になっていたのです。大きな力で背中を押された気持ちでした。

現代(18回・2009~20回・2011)

今後の新しい方針を定めました。「時代とともに歩む写真を撮り続けた林氏の精神を継承し、それを乗り越え未来を

切り開く写真家の発掘を目指す」とし、林賞の17回までの成果をふまえ、さらに大きく拡大させたのです。自由化した不安はありましたが、第18回「ロマンティック・リハビリテーション～夢みる力・20の物語～」の受賞は、それを一掃しました。練りこんだテーマ、斬新な被写体の見せ方、期限を設けた責任ある出版など今後の写真のいくつかの方向性が示されていました。最終候補に残った作品にも目をみはりました。そこには、プロ・アマを問わず展評や書評で幾度も目にする写真家の名前がならんでいたからです。そして19回「トオヌップ」、20回「基隆」とすでに独自のスタイルをもった「旬」の作家の受賞が続いています。

振り返ってみると、この20回、20年は、国内外とも政治、経済、文化の何をとっても激動の時代でした。とくに今年、3月11日には未曾有の東日本大震災が襲い、福島第一原子力発電所も被災しました。その後の放射能汚染は今なお暗い影をおとしています。史上まれに見る災害で、今後の人類の価値観までもが変わるともいわれています。

写真界に転じますとIT化でデジタルカメラがフィルムカメラにとてかわりました。誰もが写真を手軽に撮れる時代に入りました。このことによって、表現者である写真家も、今よりもまして高いオリジナリティーや芸術性を求められる時代に入ったと思います。20回までを俯瞰すると、テーマはさまざまですが、やはり激動のなかを生き抜く人間がしっかりと捉えられていたように思います。もちろん次の時代も人間や社会は永遠のテーマであることは間違ひありません。でも将来は、たとえば人間を超える宇宙的なものや逆にミクロ的なものが出てくるかも分かりません。あるいは想像を絶するアートが生まれてくるかも分かりません。私たちはそんなワクワクドキドキする写真の未来を信じて止みません。

「社会は心を擊つ写真をさがしています」。

林賞はそんな気持ちをこのキャッチフレーズに託しました。将来、連綿とつづく受賞作品群が近代写真史の一端をひもとく資料にならんことを期待しております。

最後になりましたが、20回までの長きにわたってご尽力いただきました選考委員、林家、写真界の関係各位、参加いただいた写真家の皆様、そして創設来かかわって来られた方々に対し厚くお礼申し上げます。林賞は当地から全国へ発信する写真賞です。市民の皆様のご理解があつてこそ成り立つ賞です。これからも愛される賞としてともにあります。

(ありた・じゅんいち 周南市美術博物館館長)

※2003年4月21日、徳山市、新南陽市、熊毛町、鹿野町の2市2町は合併して周南市となりました。